

漢法苞徳塾資料	No. 013
区分	治療・臨床
タイトル	飲・痰・瘀の治療
著者	八木素萌
作成日	

◎飲食物は摂取された後「水分、陰交」の分で津液として化成され「津液之府」である「膀胱」に「泌」され蓄えられる。この津液は「気化」作用を受けて全身に行ぐって生理的機能を果たすものとなる。「気化」の臓器は「腎」「心」「三焦」「肺」である、又「後天之氣」を主り行ぐらせるものは「脾」「胃」である。

『素問』太陰陽明論第 29 に「足太陰者三陰也 其脈貫胃属脾絡嗌 故太陰為之行氣於三陰 陽明者表也 五臟六腑之海也 亦為之行氣於三陽 臟在各因其經而受氣於陽明 故為胃行其津液……」とある。つまり飲食物から摂取された水分が正常に生理的に機能する態様に転生したもの——換言すれば正常に作用する状態に化生して体内で機能している「水分」これが「津液」である。この「津液」の状態になることが出来ない状態（生理的には正常な状態に無い）の「水分」が「飲」であり、それが更に濃縮された状態が「痰」である。「瘀」は停滞し遅滞していて正常に機能していない状態に在る「血」である。「津液」と「血」とは相互に転換しあうものとして把握されている。『靈樞』癰疽第 81 に「腸胃ニ穀ヲ受ケ……中焦氣ヲ出シテ露ノ如ク上ニ谿谷ニ注イデ孫絡ニ滲ム 津液和調シ變化シテ赤ク血ト為ル……」とある。それ故に「汗」は「心の液」であり、「津液」の喪失は「血」の渇きや耗損をももたらすものと認識されるのである。また「痰」が経気を塞いで「血滯」を来して「瘀」を生じるものでもある。

◎竇漢卿は『流注指要賦』の中で

「刺傷寒結胸痞氣」に…

「傷寒下シテ後ニ結胸痞氣スル者ハ 皆足ノ三陰ノ終ト手ノ三陰ノ始ナリ

胸中結痞ハ 過ハ足少陰ノ腎ト手ノ厥陰ノ包絡ニ在リ 両經ノ井ト原ヲ刺シテ以テ胸中ノ氣ヲ瀉セ

心中結痞ハ 過ハ足太陰ノ脾ト手少陰ノ心ニ在リ 両經ノ井ト原ヲ刺シテ以テ心中ノ氣ヲ瀉セ

胃中結痞ハ 過ハ足厥陰ノ肝ト手太陰ノ肺ニ在リ 両經ノ井ト原ヲ刺シテ以テ胃中ノ氣ヲ瀉セ

或ハ上脘・中脘・下脘ニ痞結ニ応ジテ之レヲ瀉セ」と述べている。

また「刺傷寒三陰腹痛法」に…

「傷寒ノ邪三陰ノ内ニ在リテ交通スルコトヲ得ズ 故ニ腹痛ト為ル

手足ノ經ハ皆腹ニ会ス 經ニ随ヒテ之レヲ取レ

脈弦ニシテ腹痛スル如キハ 過ハ足厥陰ノ肝ト手太陰ノ肺ニ在リ 太衝・太淵・大陵ヲ刺セ

脈沈ニシテ腹痛スル如キハ 過ハ足少陰ノ腎ト手ノ厥陰ノ心包ニ在リ 太谿・大陵ヲ刺セ

脈細沈ニシテ腹痛スル如キハ 過ハ足太陰ノ脾ト手少陰ノ心ニ在リ 太白・神門・三陰交ヲ刺セ
已上ノ数穴ハ三陰ノ腹痛ヲ刺ス法ナリ」と述べている。

痰はつまり湿熱であり、飲はつまり胃の寒水であり、癰はつまり汚濁であり淀みである。いずれも腎陽の温煦と陽を降下させる機能の衰えと、肺の肅降・脾の敷布・肝の条達などの機能低下であり、「気は血を統べる」と言われる様な「気」「陽気」「元気」の衰えが「気血の疎通」を妨げている問題として収斂される。二便と汗の状態が良好ではない現象が起こっているのであり、上逆や腹満が問題であるのである。その意味から「寶漢卿」の治法は実用価値が高い。また『鍼灸重宝記』の指摘にも注意を払う必要がある。

◎『鍼灸重宝記』の「秘結」に

「風秘は、風痰大腸に結して通ぜず、風を発散すべし、
気秘は、気とどこをり、後重せまり、いたみ、煩悶、脹満す、気をめぐらすべし、
寒秘は、腹冷、痙癖、結滞す、温補すべし、
虚秘は、津液虚し榮少なくて、かわき渋る、潤し滑にすべし
熱秘は、実熱、気ふさがり、心満、腹脹り、煩渴す、熱をすゞしくすべし」とある。

この分類と治則の指示は、「配経・撰穴・手技の選択」に実用的な示唆をもたらす。

◎「飲」は「痰飲」「懸飲」「溢飲」「支飲」に分類される、それらの具体的な症状は、

- a)「痰飲」……腹部の膨満感と痛みを覚えるが腹壁は硬い、胃に振水音があり、清痰を嘔吐でもする様に出す、口渇しないか渇しても飲み物を欲っしない、目まいや頭暈がある、或は、腸内でコボコボと言う水音がする。舌苔は白く良く湿って滑らかであるか黄色味を帯びていて膩であり、脈は弦滑である。これは中焦（主に胃）が、冷えて機能の衰えが起こり飲食物（水分が多い）が消化管に滞っているのである。

◇治療◇

〈薬方〉苓桂朮甘湯の類。

〈鍼灸〉

- b)「懸飲」……胸脇が脹痛し、この痛みは、寝返りをうったり、痰を格出しようとする時や、呼吸に応じて、強くなる。呼吸が早くあえぐ様である。舌苔は白、脈は沈弦である。

◇治療◇

〈薬方〉十棗湯、葶歴大棗瀉肺湯の類。

〈鍼灸〉

- c)「溢飲」……手足や身体がものうく重く覚え痛みも伴う、甚だしい時には全身浮腫し小便不利となる、或は、発熱悪寒し汗出ず喘咳して泡の多い痰が多く、舌苔は白で、脈は弦緊である。

◇治療◇

〈薬方〉 小青竜湯の類

〈鍼灸〉

- d) 「支飲」……喘咳して痰が胸いっぱい詰まっている様で、甚だしい場合には横になって臥せる事が出来ない、痰は多量で泡沫が多く、喘咳は長く続き目や顔が浮腫する、舌苔は白膩で、脈は弦緊である。

◇治療◇

〈薬方〉 小青竜湯の類、脾腎の温補を要するものには、腎気丸・苓桂朮甘湯の類。

〈鍼灸〉

◎「飲」の治療上の基本的な事項について

『中医内科学』（高等医学院校教材 一中医鍼灸専門用—上海科学技術出版社）には「湿・痰・飲は一つの源流から三つに岐れたもので、津液が正常に機能し変化して行く働きがうまく行かない為に形成されている病理的な産生物である。」と記述している。「飲」の形成は、多くの場合には脾腎の「陽気」がもともと弱い為に、飲み物を津液に変えそれをさらに体を温ためる成分として転換させること、その作用を全身くまなく行き渡らせると言う脾の「運化」機能が、飲食物や湿気の高く冷んやりした場所の不正な影響などの為に障害されて、津液に転化出来ないものが体の或る一部の部位で停滞したものが「飲」となっている。それが胃腸で停滞しているのが「痰飲」、胸脇で停滞したものが「懸飲」、弥漫的に体中に溢れる様になっているのが「溢飲」、胸肺を犯して問題を生じたものが「支飲」である。『金匱要略』の記述はこの様になっている。つまり「脾」「腎」「肺」と「津を主っている」手陽明経、「液を主っている」手太陽経、「水腑」である膀胱の足太陽経、「胃」の足陽明経、「決瀉の官」の経の三焦、また、胸脇に流注している経脈、これらが重要であり、うまく使う事が必要であると判るのである。

◎『湿』について

「湿」には「内湿」と「外湿」とがある。

「外湿」は六因の一つで、これは常に体の下部から侵す性質がある。湿度の高い季節の中で過ごしたり・シトシトと降る長雨の中で水びたしになって歩いたり・住居が湿気の多い所であったり・などの場合には、「外湿」の邪が身体を侵襲することになる。「内湿」は病理的な産生物であり、病の結果であるが同時にそれは亦別途に病因性を現わすものである。「内湿」の原因の多くは「脾」が健全な働きを失調した為に、水分が停滞凝集して生じるのである。このように「内湿」と「外湿」は別なものであるが疾病の出現の過程では相互に関連しあって影響するものである。

「外湿」によって発病する場合は、大抵は脾胃が冒されるので「脾」の本来の「運行」の機能・役割がうまくゆかなくなる、従って、体の津液の健常な輸布や転化形成は失調される事になる、こうし

て「内湿」状態の症状になる。そこで、「泄瀉」や「腫満」や「飲邪」などの症候が現われるのである。

各々の臓腑の機能・職分には差があり、固体の間にも素質の差がある。また治療の適不適という問題がある。その為に身体が「湿邪」に犯されると「寒化」したり「熱化」したりする。素質的に「脾陽」と呼ばれている機能が「虚弱」であるものは、容易に「寒化」状態となり、素質的に「胃熱」傾向のある者の場合では、容易に「熱化」状態になる。「寒涼」の性質のものをを用いすぎると「寒化」し易いのであり、妄りに「熱」性のものや「燥」性のものをを用いると「熱化」し易いものである。

「湿邪」が「寒化」になる場合には「脾陽」は多くの場合容易に損傷されるし、「熱化」の状況が多い場合には「胃陰」が容易に消耗されて損傷する、と言うのが「湿邪」による病の変化の趨勢である。ただ、「湿邪」と言うのは「陰性の邪」であり、粘性と停滞性があるものである。そこで「湿」が勝れば「陽」は微かになって行くから「湿邪」の病の主要な発展趨勢は「寒化」傾向であると言える。

同時に考慮に入れて置かなくてはならないのは、「湿」は「長夏」「土用」の気であると言う点である。その為に「湿ハ熱ヲ挟ム」と言われている点と、「寒極マレバ熱トナル」と言われている点である。基本的な「湿邪による病」は次の如きものである。

1. 寒湿困脾

《病機概要》

- 〈a〉涼しい所をむさぼり求め、生物や冷たいものや瓜類などを多食する結果、寒えの性質を持った「湿」が「中焦」で停滞するに至ったもの。
- 〈b〉雨を冒して歩き回ったり水の中に長く居たり、湿気の多い所で暮したり、等の為に遂に「寒湿」が体内を冒すに至ったもの。
- 〈c〉素質的に「内湿」の傾向を持っているものが、「中陽被困」＝中焦の陽性の機能のことで、具体的には「胃」の消化力の低下＝を起こして内に「寒湿」を形成したもの。

以上の三種類がある。

《主要な症状》

腹が張って苦しい・食事が入って行かない・むかついて吐きたい・淡い唾が多い感じで喉の渇きを覚える事がない・腹痛し溏泄する・頭が何かで被せられている様に重い・身体が倦るく重いしムクミがある。〔舌苔〕白膩。〔脈〕濡緩。

《治療原理》温中化湿。

《方 剤》胃苓湯・実脾飲の類。

《鍼 灸》口述

2. 湿熱中阻

《病機概要》

〈a〉「湿熱」の邪に感染したもの。

〈b〉甘みの多い食品や味の濃厚な食品を不摂生に多食したり、乳製品の多食、酒の呑み過ぎ・等の結果「湿熱」が醸成されたもの。

《主要症状》

腹が痞えて苦しい・吐き気ムカツキがあって食べたくない・口中が粘り苦い・口内は乾くが飲み物は不要・尿が濃い・或は顔色や目の色や皮膚が黄色くなる・或は皮膚が痒くなる・或は身体に熱があって熱は起伏し汗が出て解熱しない。〔舌苔〕黄膩。〔脈〕濡数。

《治療原理》清熱化湿。

《方 剤》連朴飲・甘露消毒の類。

《鍼 灸》口述

3. 脾虚湿阻

《病機概要》

多くは飲食の不摂生の為に「脾」が虚して「脾」の「健運」と言う『職能』が失調するので「水湿」が内に生じているのである。

《主要症状》

顔色は栄養失調の場合の黄色の様な萎びたような黄色（萎黄色）・気力に乏しく精神的に低調に落ち込んでいる・四肢が重く動くことが億劫である・腹部がスッキリと伸びやかでは無く頼りなく不快である・脂っこいものが嫌である・食物に風味がない感じで食思が湧かない・薄少な溏便であるか泄瀉する（栄養失調性のような下痢便）など。

〔舌苔〕薄膩で舌質は色が淡く肥胖している。〔脈〕濡細。

《治療原理》健脾化湿。

《方 剤》香砂六君子湯の類。

《鍼 灸》口述

◎治湿の用薬上の注意

1. 湿を治療する時は「脾虚」と「脾実」が主であるが、その軽重をよく診て靈活な運用をしなければならない。「湿」が盛んである場合には湿を除く方法（除湿法）が応じているのである。芳香利湿剤・苦温燥湿剤・淡滲利湿剤を用いる。妄りに補虚の剤を用いないものである（清・呉達『医学求是』の「血証求原論」に“滋陰之品最易傷脾”とある）。脾虚が主なものでは健脾と化湿の剤を配合して用いるべきである。

2. 「湿」が「寒化」に従ったものである為に「脾陽」が障害されるに至ったものは、「温熱」性質の薬を用いて湿を燥かすべきものであるが、苦温燥湿の薬を選んで用いる他に脾陽を温めて運化の作用を助ける薬を配合すべきである。「湿」が「熱化」に従った為に「胃陰」が障害されたものは、養陰薬と化湿薬を配合して用いるべきである、つまり熱を清まし湿を「化」すが、陰に障害を与えないもの、陰を養い津液を生じるが湿を助けない、と言う配薬が原則なのである。
3. 治湿の為の用薬は「軽・疎」で靈妙な活動性を与えるものが貴ばれる、湿邪を透達させて脾の運化を健全にするものが用いられるべきである。

※※清・呉達『医学求是』の「血証求原論」に注目したい文がある※※

……夫人身之陰陽・以太陰、陽明為主・脾為太陰湿土・孤臟以貫四傍者也・胃為陽明・化氣干燥金・又為氣血之海・十二經脈之長也。脾以陰土而升干陽・胃以陽土而降干陰。土位干中・而火上・水下・左木・右金。左主乎升・右主乎降。五行之升降・以氣不以質也。而升降之權・又在中氣。中氣在脾之上・胃之下・左木、右金之際。水火之上下交濟者・升則賴脾氣之左旋・降則賴胃土之右轉也。故中氣旺・則脾升而胃降・四象得以輪旋；中氣敗・則脾郁而胃逆・四象失運行矣……總之中氣為升降之原・

脾胃為之升降之樞軸・樞軸不運・則火浮而水沈・胆火飄乎上而上熱・肝火郁於下而下熱。每見弦大之脈・并無虛寒之形・血証之易乎誤治者以此……風為百病之長・肝為五臟之賊・天地之風無隙不入・和風養人・賊風傷人……蓋人身以精氣為主・而不知氣生乎精・精生於穀・穀化乎脾・是以臨診細審・參以脈象・隨意變通・以脾胃為主持・以升降為運用・於斯道也無余蘊矣。……

◎痰の治療

痰の一般的な病機……痰の產生は「肺」「脾」「腎」の機能と関連している。「肺ハ治節ヲ主ドル」が外邪に侵襲されると、「肺」は澄んで清めていて静肅であると共に「氣」を宣布すると言う機能が失調する、そうすると「肺」の「津液」は凝聚して「痰」を形成する。

「脾ハ運化ヲ主ドル」ものであるが外湿の邪に侵されたり、飲食に不摂生であったり、思慮しすぎたり過労になると、「脾・胃」は障害され「運化」の作用が失調するので、水湿は内に停滞して凝聚して「痰」になる。

「腎ハ開闔ヲ主ドル」ので「腎陽」が不足すると「開闔」をうまく行なえなくなる、そうすると水湿は上に溢れて凝聚して「痰」を形成する。「命門の火」が衰弱すると「脾陽」の温め運化する働きが低下するので飲食物を消化し吸収して体を滋潤する成分に転化することがうまく運ばなくなる、それで湿を生じて「痰」になってしまう。「腎陰」が虧損消耗すると内に「虚火」が熾んになって「津液」を灼くので「痰」が出来てしまう。

これらの他に「痰」を生成する幾つかの病機がある。願いや想いが遂げられない為に「肝氣」が鬱

結して「氣鬱化火」の仕組みで津液が灼られて濃縮を受けるので「痰」が生成される。「肝陽」が「風」と化して「痰涎」が内に停滞して種々の生理機能を閉塞させるのは「風痰」であり、「熱」と「痰」とが相互に影響を及ぼしあうのが「熱痰」であり、「寒」と「痰」が相互に作用し凝聚して形成される「寒痰」であり、「湿証」を兼ねている「痰」症候の「湿痰」があり、「燥証」を兼ねている「燥痰」、これらがある。

「痰」は一端生じるとなかなか解消しなもので体内に留滞する、そして「氣」に随ってその昇降に伴って体内の至る所に行き到らないと言う事はない。或は「肺」の働きを妨げ・或は「胃」に行き・或は「肝」で鬱滞し・或は「心竅」を蒙閉し・或は「腎」を変動させ・或は「経絡」に行ってその機能に変生を来して種々の症状を出現させる。「痰」には咯出できて見えるものと、「痰」証と言う特有の症状から判断できるものがある。また、「痰」にはその性質〈寒・熱・燥・湿・風・労など〉や所在部位によって、それぞれ特有の具体的な症状を呈するものである。以下に所在部位に従う分類で見た「痰症」を述べる。

1.痰阻乎肺

《病 機》

風・寒・湿・熱などの邪や、持病的な長期の咳喘などで、肺が津液を敷布し巡らせる機能が低下し、津液を凝聚させて「痰」を造るもの。

《主要症状》

白色の咯出し易い痰が多く・咳をし喘鳴したり息する時には嗽がある・割合に寒熱の表証を伴う事が多い。〔舌苔〕薄く白膩である。〔脈〕浮或は滑。

《治療原理》宣肺化痰。

《方 剤》止嗽散・杏蘇散の類。

《鍼 灸》口述

2.痰蒙心竅

《病 機》

多くは七情の障害による、例えば抑鬱や暴怒などである。又湿濁の邪氣を受けて生理的に氣機が妨げられ、それが氣結を来たして「痰」の凝聚が起こり、この「痰」が「心竅」を阻害閉塞させる事が原因である。

《主要症状》

精神の昏蒙や癲狂・胸の苦悶や心痛・或は昏倒し人事不省に陥り喉に痰が絡んだ痰喘嗽の痰鳴がある。〔舌〕舌質は胖であり、舌苔は白膩である。〔脈〕滑。

《治療原理》化痰開竅。

《方 剤》導痰湯・蘇合香丸の類。

《鍼 灸》口述

3.痰蘊脾胃

《病 機》

飲食の不摂生や過剰な思慮や労倦の為に「脾・胃」が障害されて「脾」の「運化」機能の健全性が損なわれた為に「湿」が生じて「痰」の形成に至ったもの。

《主要症状》

腹が痞えて苦しく食物は胃に下がって行かないし悪心嘔吐する・身体が重く倦怠いし嗜眠勝ちである。〔舌〕 胖。〔脈〕 濡緩。

《治療原理》 健脾化痰。

《方 剤》 平胃散・六君子湯の類。

《鍼 灸》 口述

4.痰鬱於肝

《病 機》

多くは肝気の鬱結の為に気が結ばれて痰が凝聚するもの、痰と気とが相互に阻塞し合って引き起こされる。

《主要症状》

咽喉に所謂ヒステリー球や喉に焼肉の薄片がへばり付いているかの様である・胸脇に隠痛を覚える・オクビが出る・怒り易く善く鬱閉している。

〔舌〕 舌苔は薄く白いし膩である。〔脈〕 弦滑。

《治療原理》 解鬱化痰。

《方 剤》 四七湯の類。

《鍼 灸》 口述

5.痰動於腎

《病 機》

慢性病が腎に影響して「腎陽」が不足するに至って、「腎陽」の「蒸化」による温煦の力が無くなり、この為に水湿の内停が起こり、これが上に溢れて来るように「痰」と化す。また「腎陰」が消耗虧損した為に虚火が旺んになって津液を灼って「痰」を形成するもの。

《主要症状》

喘息様に気逆し呼吸は促迫気味になる、この症状は「腎」の変動がひどい時には重くなる・或は浮腫して寒がり・腰や膝は冷痛を覚え・夜明け頃には瀕尿となる。この場合〔舌〕は淡く〔脈〕は沈細となる。今一つの、「虚火上炎」の「痰」の場合には、頭は暈が被せられたように不快で、耳鳴りがし・腰膝は酸軟を覚える、この場合の〔舌〕は紅色になり舌苔は少ない、〔脈〕は弦細で数を帯びる。

《治療原理》温腎化痰、または滋腎化痰。

《方 劑》濟生腎氣丸・または金水六君煎の類。

《鍼 灸》口述

6.痰留骨節経絡

《病 機》

留滞した痰濁が関節や骨や経絡に流入する為に、それらの部位に気血の鬱滞を来たして絡脈が痺阻されて起こる。

《主要症状》

関節の疼痛と腫脹・四肢の麻痺強直や知覚麻痺や運動障害・或は半身不随・或は口眼歪斜〔顔面麻痺〕・或は瘰癧やリンパ腫や結節腫大や腫塊・などが現われる。
〔舌苔〕は白膩。〔脈〕は弦滑。

《治療原理》軟堅消結・通絡化痰。

《方 劑》四海舒鬱丸・指迷茯苓丸などの類。

《鍼 灸》口述

◎治痰の用薬上の注意

1. 痰はもともと肺脾腎の失調で形成されるから本来的には虚であるが、痰が一端形成されて体内に停滞してしまうとそこは邪実になっている。故に痰証は臨床的には「本虚標実」が多く見られる。痰の治療は臓腑の虚实・病症の標本緩急を正確に掌握して行なう必要がある。急症では痰の始末が第一 {標治} に先ず行なわれなくてはならない、故に化痰・去痰を主とする。緩症では {本治} を主とする、肺・脾・腎などの治療が大切である。
2. 痰の性質を考えて治療法を選ぶものである、熱痰はこれを清まし・寒痰には温ため・燥痰は潤す・湿痰は燥かし・風痰は散じ・鬱痰は開き・頑痰は軟にする・等の方法を講じる。